

「これからの学校像とこれからの教育課程・学習指導・学習評価に関して」議論検討すべき
と考えること

秋田喜代美（学習院大学）

<基本スタンス>

・急激に変化する社会であるからといって、急速な教育改革を加速化することではなく、現行の教育課程の目指す学校像、学習像をより一層多くの教師や社会が理解を深め共有できるような、カリキュラムのリ・デザイン（OECD,2021）、デザインの原則を明確にしていくこと、Slow & Deep を目指す改革が必要である。

・教育課程のみに焦点を当てた改革から、教育課程—教材や教科書—学校評価の在り方—地域の学校文脈—教師や学校に関わるリソースの実態という、学習者を取り巻く学びの環境や資源のエコシステム全体を見通していくことが必要である。

特にその時間軸（クロノシステム）としての発達や学びの連続性と各学校種や学年という育ちという縦の視点から、公教育における学校種でのあり方を考えることが必要である。

<コンピテンシーを育む発達における学びや育ちの軸の一層の明確化>

・各教科で求める資質能力からこれからの時代に求められる資質能力を考える総和的な資質能力だけではなく、横断的な形で各発達年齢、学年に応じて汎用的に求められる資質能力を押さえていくことが必要ではないか。

たとえば、学校始まりからの学習観（低学年の時から探究的な問いを持つことの育成）や協働における援助要請方略・受援力の育成、小学校中学年・高学年・中学校等での学習方略やメタ認知的方略の育成や情報活用能力、中等教育段階での批判的思考力や論理を組み立てる力、人の育ちや権利、生き方なキャリアや将来を見通す力、情報活用能力、市民的資質、環境コンピテンシーなどは、各教科内の特定単元や総合で扱うだけではなく教科をまたいで横断的に育むことで意味を持つ内容である。これからの時代にさらに求められるコンピテンシーを発達科学や学習科学の知見をふまえて、どのように考えていくのかを検討をする必要がある。それを通して持続可能な社会を作る担い手の育成や大人になっても学び続けていける学習コンピテンシーの育成が可能となるだろう。

・その縦系列を明確にすることは、各個人の学ぶペースに応じた学習や個性化、学年主義を超えて複数学年をまたぐゆとりももったカリキュラムなどの可能性を考えられよう。

<学ぶ時間の質の向上>

・学びの変革は学習における時間の質の変革である（Clark,2021）。授業時数を増やすのではなく、少なく良質な高度な課題が深い学び、探究的学びを保障するのと同様、学年でのりしろや重なり、往還などを強めていく時間単位の発想を可能とできるようにしていく必要があるのではないか。授業や学習と評価のサイクル